

" From Writing Ethnography to Doing Ethnography" meeting at Osaka University

Denzin, N.K. & Lincoln, Y.S (1994) 'Introduction - Entering the field of Qualitative Research -' in Denzin, N.K. & Lincoln, Y.S(1994) Handbook of Qualitative Research. Sage,London

rep. NAKAHARA, Jun
Dept. of Educational Systems Technology
Graduate School of Human Sciences, Osaka University

Summary

社会学ならばシカゴ学派の台頭、文化人類学ならば、ミード、ベイトソン、マリノフスキーに代表されるように、質的研究は、人間科学のディシプリンにおいて、際だった歴史を有している。本稿では、人間科学における質的研究の歴史を簡潔にレビューすることを目的とする。

注. なお、本報告は逐語訳をおこなっていない。全文を通して要約をおこなっているため、該当段落にない文章も含まれることを注意されたい。また、本稿の性格上、話題が非常に広範囲にのぼるので、本会に取り上げる必要のない部分に関しては一部省略している。

Difinitional Issue

後述するように、質的研究の歴史は5つのエポック(epoch)をもって以下のように分節化が可能である。

1900年から1950年	traditional moment	古典的なエスノグラフィー
1950年から1970年	modernist moment	質的研究と量的研究の統合あるいは体系化の時代
1970年から1985年	blurred genres moment	象徴的相互作用論から批判理論にいたる様々なアプローチに特徴づけられる時代
1986年から1990年	crisis representation moment	古典的で、主意主義的なエスノグラフィーが産出する知見に異議が唱えられ、より論証的で、反省的な方法論が希求された時代
1990年から現在	postmodern moment	<理論>とは、多声的な<物語>であり、社会的な批評や論評を対象にしているという認識にたつ時代

この5つの時代区分には、認識論(Epistemological)上の変化も並列している。例えば、古典的エスノグラフィーが重視された時代は、実証主義(positivism)のパラダイムに、次の時代は、ポスト実証主義の議論、解釈学、構造主義、記号論、現象学に影響を受けている。「blurred genres moment」においては、批判理論・解釈理論にとって人間の存在が中心的な問題となり、質的研究が認知されはじめた。しかし、同

時にこの時代は、「表象・代表(representation)の危機」ともいうべき状況をうみだした。すなわち、研究者が自己や被観察者をテキストにどう位置づけてよいのかという大問題に苦闘する時代になった。最後の「postmodern moment」は基本的に、旧来のパラダイムに対する疑い(doubt)から生じている。

The Qualitative Researcher as bricoleur

Qualitative Research as a site of Multiple Methodologies and Research Practice

解釈的实践としての質的研究には、他に優越する方法論はひとつもないゆえに定義が非常に困難である。質的研究は、様々な独立したディシプリンのもとで使用され、単一のディシプリンに回収することは不可能である。

ゆえに質的研究を行う研究者は、記号論・物語論・音韻論はてには、統計までも様々な使用する。

ある特定の方法論や実践が他に優越していたり、または他を排除することは原理的に不可能である。

人間科学において、様々なコンテキストで方法論や研究実践が様々な方法で行われるが、それは各ディシプリンの歴史に従属している。様々な方法と研究戦略を有するそれらの歴史を参照することで、どのように多層的な方法論の使用が行われるかが明らかになる。

このように質的研究の方法論が多様性きわまるため、研究者が定義を行うことは非常に困難である。ここでは、さしずめ以下のNelsonの定義を参照する。

質的研究は学際的で、しばしばディシプリンを越境し、確立されたディシプリンに対抗する性格を有している。それは、人間科学・社会科学・物理学を横断する営みである。質的研究は、同時に多くのパラダイムに焦点をあてる。その研究の実践者は、多様な方法論に敏感である。彼らは、自然主義的な視座にコミットしつつ、人間の経験を解釈学的に理解する。研究のフィールドは、本質的に政治的であり、多様な民族性と政治的立場に特徴づいている。(以下略)

Resistance to Qualitative Research

アカデミックにおける量的研究と質的研究の確執

Qualitative Versus Quantitative Research

質的研究は、量や密度や頻度などで厳密に検証されえず、測定できない「意味」や「過程」に関心をよせる。また、質的研究は、社会的に構築された現実や、研究者と研究するものの関係、研究を特徴づける状況的な制約に焦点化する。そして、質的研究を実践する研究者は、そのような探求が「価値コミ」で行われることを強調する。彼らは、社会的経験がどのように構築され、どのように意味を付与されるのかを探求しようとする。

それに対して、量的研究は、「過程」などではなく「変数」間の因果関係を測定・分析することを強調する。研究は「価値中立的」な枠組みのなかで行われる。

Research Style : Doing the same things Differently?

量的研究の推進者も、質的研究の推進者も、自分たちが他人に主張するだけ価値のある社会的現実を把握していると思っているし、その考えや発見を伝える形式やメディアを有している。しかし、質的研究は量的研究と以下の5つの点で相違する。それは要約すると、同じ問題でありながらそれを語る方法にある。

1. Use of Positivism (分析・測定 - 一般化 - 適用)

質的研究を行うものでも統計を用いることがあるが、彼らは自らの発見を量的研究の研究

者がやるようなかたちで複雑な統計を用いて表現することはない。

2. Acceptance of postmodern sensibilities

ポストモダンに傾倒した研究者は、実証主義の方法論を明らかに拒絶する。

3. capturing the individual point of view

質的研究の研究者は、詳細なインタビューや観察を通して、行為者のパースペクティブに肉迫していると実感する。

4. Examining the constraint of everyday life

量的研究を行う研究者が、一般化や抽象化を行い社会的な現実そのものを直接的に研究することがないのとは異なり、質的研究の研究者は、はるかに日常生活の制約に直面する。

5. Securing rich description

量的研究が、法則定位に関心を持ち、社会的現実の詳細を無視する一方で、質的研究を行うものは、社会的現実のリッチな記述が、価値あるものとおもっている。

この5点は、リサーチスタイルの相違や世界観の違い、表象の相違に還元できる。質的研究は、民族私的な文章、歴史的な語り、自伝的語りなどを用い、量的研究は、数式や統計表、グラフ、非人称的かつ3人称的な語りを用いる。

The History of Qualitative Research

近代の社会科学は、パターン化された振る舞い、社会における過程を分析・理解することが使命であった。そして、社会学者が客観的に世界を観察できるのならば、それが可能であると考えていた。

エスノグラフィーの歴史(省略)

The Five Moments of Qualitative Research

Traditional Period	1900 - W.W	実証主義のパラダイムに基づき、未開の人々 (others)・文化を対象とし「客観的」で植民地的な記述を「孤独」に行っていた。(Malinowski) 客観主義への系統、帝国主義との共犯、monumentalism、調査対象は不変という信念、シカゴ学派は、ライフヒストリーを強調し、解釈的な方法でふつうの人々を記述する。(Slice of Life Ethnography)
Modernist Period (Golden Age)	戦後 - 1970	質的研究の形式化・厳密化が試みられた時代 解釈理論に影響を受けた新しい世代がそれを質的研究に導入し、声なき人々に声を与えた時代 ポスト実証主義が認識論の基礎となった。
Blurred Genres (あいまいな時代)	1970 -1986	質的研究が、パラダイム・方法論・研究ストラテジーの飽和にいたる時代 理論は、象徴的・誤差要論から、構成主義、現象学、エスノメソドロジーまで広がる。 Geertzは、古典的な行動論的・実証主義的な研究から、多層性のある解釈学的、オープンエンドのアプローチへの移行を説いた。(Thick Description) テキストにおける特権的な声への反発(Geertz)

			社会科学と人間科学の境界の消失
	Crisis of Representation (テキストの模索)	1986 - 1990	研究、およびテキストを書くことをreflexiveに行うことの必要性。 「書くこと」そのものへの省察の時代 エスノグラフィーにおける評価の問題
	PostModern Moment	1990 - Now	<理論>とは、多声的な<物語>であるという認識にたつ時代 「大きな物語」は、ある特定の問題や状況にFitする、より局域的で小さな<理論>にとってかわるとい認識

Qualitative Research as Process The Other as Research Subject

質的研究のプロセスには、相互に結びついた一般的活動として、「理論・方法・分析」や「ontology・epistemology・methodology」と呼ばれるものが存在する。これらは、研究者の個人的出自を強く反映している。なぜなら、研究者は、ある特定の階級・民族・文化・倫理観をともなったコミュニティの中に身をおき発言するからである。

多様な文化に彩られた研究者たちは、ある特定の思想(理論・ontology)をもって、特定の方法によって導かれた(methodology・analysis)問題を特定・詳述するのである(epistemology)。

近代という時代がはじまって以来、質的研究は常に2つのゴースト(double-faced goost)ともよべる信念に悩まされてきた。それは第一に、「秀でた観察者は、客観的に理路整然としたかたちで、自らの観察した社会的現実を性格に報告できるはずだ」というものであり、第二に、「研究者は、自分の経験を正確に表行できる真正の主体であるはずだ」というものである。

最近になって、そのような考え方はポスト構造主義者・ポストモダニストたちによって攻撃をうけるところとなった。個人の内的世界を忠実にうつす窓ではなく、また何人たりともそのまなざしは、言語・ジェンダー・社会的階級・レイシズムの色眼鏡を通してしか観察できないというものである。個人は、自分の行為や意図について「完全」な「説明」を行うことはできない。できるのは、物語ることだけである。故に、どんな方法も、進行中の人間の経験の微妙な変化を把握することはできない。つまり、客観的な観察などそもそも存在しない。観察とは、そもそも観察するもの、観察されるものに社会的に埋め込まれているのである。

以下、質的研究における一般的な活動を、以下の5つのPhaseから考察する。

- phase1. 研究するもの、あるいは、研究されるものが多文化的な主体であるということ
- phase2. 解釈的パラダイムについて
- phase3. 研究ストラテジーについて
- phase4. データ収集法、分析法、解釈の技術
- phase5. 解釈の方法

phase1. The Researcher
Value-Freeな存在としての研究する主体の崩壊

phase2. Interpretive paradigm

「人間はいかなる存在か(ontology)」「探求するものと、されるものの関係はいかなるものか(epistemology)」「我々は世界をいかようにするのか(methodology)」などの問いに対する「信念(前提)」は質的研究者がどのように世界を見て、いかに行為するかに強い影響を与える。

これら「ontology・epistemology・methodology」の結びつきを「パラダイム」といい、行為を導く、研究者にとっては自明の信念体系のことを「interpretive framework」という。

「interpretive framework」には、以下の4つの主要なパラダイムが存在するが、それは「評価基」「理論の形式」「研究者自身の語りの様式」「研究ストラテジー」を拘束する(Table1.2参照のこと)。

phase3. Strategy of Inquiry and Interpretive paradigm

研究のデザインは、リサーチクエスチョンを焦点化する。つまり、「特定のリサーチクエスチョンに答えるためには、どんな情報が適切で、その情報を得るためには、どのような研究ストラテジーをとらなければならないか」ということが問題になるのである。

研究ストラテジーとは、研究者のスキルや、彼自身の仮説、実践のことを示しており、研究者はそれをもって、自分自身のパラダイムの世界から、経験的な世界に向かうのである。研究ストラテジーは、経験的事実を集めたり、分析したりする方法論をも特定してしまう。

phase4. Methods of collecting and Analyzing Empirical Materials

phase5. The Art of Narration

質的研究者は、自らの解釈に基づいてテキストをあむ。このテキストの語りの形式には、例えばマーネン(Maanen, Tales of the Field)が明らかにしているように、告白体の物語、写実主義的な物語、印象的な物語などがある。解釈の行為自体は、非常に芸術的でもあり、政治的でもある。評価ももちろん一義的には決まらない。それぞれ異なった解釈を生産するコミュニティが存在しており、それぞれのコミュニティで、評価の基準は異なっている。

The Fifth Moment : What Comes Next ?